関西大学『社会学部紀要』第38巻第3号，2007，pp.43-60　　ISSN 0287-6817

「昭和ブーム」を解剖する

片　桐　新　自

Analysis of "The Showa Boom"

Shinji KATAGIRI

Abstract

The movie "ALWAYS: The setting sun of 3 Chome" that was released in 2005, was supported by the young and old, and received a majority of Japanese Academy award. Because this movie, describing the lives of common people in Showa 33(1958), was a hit, attention has gathered on the era centering around the Showa 30's, and has become "The Showa boom". However, actually this attention to Showa arose not in last 1-2 years ago, but when the Showa era ended and the Heisei era started, and has increased steadily. I introduce the actual situation of "the Showa boom" in this paper, and investigate its cause and its future. I point out 4 factors as the cause of the Showa boom": (1) the end of the Showa era, (2) the longevity of the Showa era, (3) bubble economy collapse, (4) the entrance of baby boomers into middle age, and the concomitant nostalgia.

Key words: the Showa boom, Showa, "ALWAYS: the setting sun of 3 Chome", historic environment, bubble economy, baby boomer

抄　　録

2005年に公開された映画『ALWAYS　三丁目の夕日』は老若男女に支持され、その年の日本アカデミー賞をほとんど独占した。昭和33年を舞台にしたこの映画がヒットしたことで、「昭和ブーム」とも言えるほどの注目が、昭和30年代を中心とした時代に集まっている。しかし、実はこの昭和への注目はここ１～２年前から生まれたものではなく、昭和が終わり、平成に入った頃に生まれ、着実に浸透してきたものだ。本稿では、この「昭和ブーム」の実態を紹介し、その原因、そしてその行方まで探求する。原因としては、(1) 昭和が終わったこと、(2) 昭和が長かったこと、(3) バブル経済が崩壊したこと、(4) ベビーブーマーが過去を振り返る年代に入ったこと、が主たるものであるということを明らかにする。

キーワード：昭和ブーム、昭和、『ALWAYS　三丁目の夕日』、歴史的環境、バブル経済、ベビーブーマー

〔付記：本稿は、平成17年度関西大学学術研究助成基金（奨励研究）（テーマ：歴史的環境の保存と活用をめぐる社会的相互作用の研究）を受けて行った研究成果の一部である。〕

はじめに

最近しばしば「昭和」という時代にスポットライトが当てられる。映画の公開、書籍の刊行、博物館での日用品や生活道具の展示、さらには昭和の町並みの保存や再現を売り物にした観光スポットも全国各地に誕生している。今や「昭和ブーム」という言葉すら生まれている。今なぜ「昭和」という時代が注目されるのか、そして注目されている「昭和」とはどのような特徴を持った時代だったのか、このブームはいつまで続くのかを、社会学の観点から分析してみたい。

1．映画『ALWAYS　三丁目の夕日』は誰に受けたのか？

写真1：映画『ALWAYS　三丁目の夕日』のパンフレット

2005年の日本アカデミー賞をほとんど総なめにした映画『ALWAYS　三丁目の夕日』は、昭和33年の東京を舞台にした映画で、若者から中高年まで多くの観客から支持され大ヒット作品となり、昭和（特に30年代）に対する関心をおおいに高めた。筆者自身も2度も見に行き、そのたびにおおいに感動し、多くの人に「見る価値のある映画だ」と奨めた。筆者が奨めたことで見に行った教え子の大学生や若い社会人はもちろん、高校生の息子すら「あの映画、やばいよ」と大絶賛だった。筆者の母親もきっと感動するだろうと思い、一緒に映画を見に行ったのだが、見終わって最初に母親から発せられた言葉は「あなた、よく泣いていたわね」という非常に冷静なものだった。もう少し感想を聞いてみると、「いい映画だとは思うけれど、なんかきれいに描きすぎているっていうか……」といったコメントが聞けた。最初はあまりに冷静に受け止めた母親の感想に虚をつかれた感じだったが、よく考えてみたら、こうした母親の受け止め方もまた自然なのかもしれないと思うに至った。

本作品は、昭和33年の東京下町での家族や地域の人々のあたたかな人間関係をテーマにした作品で、当時生まれていなかった人や、生まれていてもまだ子どもや若者で社会の現実をよく知らなかった人は、この時代はこんないい時代だったんだという映画制作者のメッセージをそのまま素直に受け止めたが、当時すでに大人として日々の生活の大変さを経験していた世代には、この作品は「あの頃を美化しすぎている」という印象を与えたので

はないだろうか。「現実はこんなきれい事ではすまなかった」という高齢者の確かな記憶が、若い世代ほどにこの映画にのめり込めない理由のようだ。実際に改めて映画館での様子を思い起こしてみると、観衆に70歳以上の人はそう多くはなく、感動して涙を流しているのは40歳代、50歳代などが中心であった。18歳を当時の若者の上限と考えれば、昭和33（1958）年にその年齢だった人は、昨年の映画の公開時点では65歳となっていた。この映画に感動できるかどうかは、この年齢あたりが境目だったのではないだろうか。そう考えれば、当時28歳ですでに２人の子どもを持っていた筆者の母親が、この映画に感動できなかったとしてもそれは当然のことだったと言えよう。

しかし、映画『ALWAYS　三丁目の夕日』が描いた昭和33年がリアルな現実そのものではなかったとしても、昭和30年代を中心にした「昭和」という時代を見直そうというブームは確かに存在する。あの映画は昭和ブームを若い世代にまで拡大する役割は果たしたと言えるが、昭和ブームを作り出したわけではない。昭和ブームはもう少し以前から静かに、しかし確実に広まっていた。むしろ、そうしたブームに乗って作り出された映画と見た方がよいだろう。次節では、日本各地で生じている昭和ブームの現状について紹介してみたい。

２．昭和ブームの現状

２－１．昭和ブームの概況

博物館や資料館あるいは商業施設に昭和の町並みが再現されたり、昭和の品物が展示されたりして人気を呼んでいるし、昭和の雰囲気の残る商店街を売り物に活性化をはかる町や、この時代を写真入りで紹介した書籍などが多数出版されている。表１は、昭和の暮らしを展示した博物館や、町並みを再現した商業施設、および実際に昭和の町並みの残っている地区などを紹介したものである。

これを見て気づくことがいくつかある。まず、博物館や商業施設のほとんどが都市圏につくられているばかりでなく、残っている古い町並み自体もその多くが都市圏にあるということだ。商業施設だけならば入館者をたくさん集める必要性から都市圏に立地したという説明がもっとも説得的であるが、博物館や実際の町並みもその多くが都市圏にあるということは、単に集客のためだけでは説明できない。実際、昭和の町並みよりもっと古い明治、江戸期の町並みを残す重要伝統的建造物群保存地区などは、いわゆる地方に多い[1)]。ここからわかることは、現在人々がノスタルジックに思っている昭和の町（暮らし）というものが、都市化（都市的生活様式）が進展しつつあった町（暮らし）のことであり、決して村落（的生活様式）ではないということである。村落（的生活様式）であれば、柳田

表1　昭和ブームの概況

分　類	都道府県	市町村	名　　称	施　　設
博物館	愛知県	北名古屋市	師勝町歴史民俗資料館 (昭和日常博物館)	師勝町図書館
博物館	東京都	葛飾区	かつしかノスタルジックシアター	葛飾郷土と天文の博物館
博物館	東京都	江戸川区	和洋折衷住宅	江戸東京博物館
博物館	千葉県	松戸市	都市へのあゆみ	松戸市立博物館
博物館	滋賀県	草津市	農村の暮らし	琵琶湖博物館
博物館	東京都	荒川区	荒川の暮らしと空間	荒川ふるさと文化館
博物館	東京都	大田区	昭和のくらし博物館	昭和のくらし博物館
博物館	東京都	千代田区	昭和館	昭和館
博物館	大阪府	池田市	インスタントラーメン発明記念館	日清食品
博物館	宮城県	仙台市	東北歴史博物館	東北歴史博物館
博物館	東京都	青梅市	昭和レトロ商品博物館	住江町商店街
博物館	新潟県	長岡市	雪とくらし	新潟県立歴史博物館
博物館	千葉県	流山市	変わり行く風景	流山市立博物館
博物館	千葉県	浦安市	浦安のまち	浦安市郷土博物館
博物館	大阪府	大阪市	モダン大阪パノラマ遊覧	大阪くらしの今昔館
博物館	東京都	八王子市	集合住宅歴史館	都市住宅技術研究所
博物館	大阪府	大阪市	近代現代フロア	大阪歴史博物館
博物館	大分県	豊後高田市	駄菓子屋の夢博物館	昭和ロマン蔵
博物館	福井県	福井市	昭和のくらしコーナー	福井県立歴史博物館
博物館	大阪府	吹田市	千里ニュータウン展	吹田市立博物館
商業施設	神奈川県	横浜市	新横浜ラーメン博物館	新横浜ラーメン博物館
商業施設	大阪府	大阪市	滝見小路	大阪スカイビル地下
商業施設	広島県	福山市	いつか来た道	みろくの里（レジャー施設）
商業施設	大阪府	大阪市	なにわ食いしんぼ横丁	海遊館マーケットプレイス
商業施設	東京都	港区	お台場1丁目商店街	デックス東京ビーチ
商業施設	岐阜県	美濃加茂市	日本昭和村	日本昭和村
商業施設	大阪府	大阪市	道頓堀ラーメン大食堂	角座ビル2階
商業施設	大阪府	大阪市	浪花餃子スタジアム	ナムコシティ
商業施設	大阪府	大阪市	道頓堀極楽商店街	道頓堀極楽商店街
商業施設	大阪府	大阪市	心祭橋筋商店街	そごう心斎橋本店11, 12階
商店街	山形県	高畠町	中央通り商店街	昭和ミニ資料館
商店街	東京都	葛飾区	柴又帝釈天参道	
商店街	東京都	台東区	浅草仲見世商店街ほか	
商店街	東京都	台東区	谷中銀座	
商店街	東京都	青梅市	住江町商店街	青梅まるごと博物館
商店街	長野県	木曽町	木曽福島商店街	
商店街	大阪府	大阪市	空堀商店街周辺	
商店街	大分県	豊後高田市	新町通り商店街	
町	東京都	文京区	本郷周辺	
町	東京都	文京区	根津周辺	
町	東京都	中央区	月島・佃	
町	大阪府	大阪市	中崎町	
町	大阪府	大阪市	ひらの町ぐるみ博物館	

特　　徴	備　　考
昭和30年代の日常生活品の展示。認知症防止のための回想法にも積極的に取り組む。	1990年４月開館。当初は農具、生活用具、埋蔵文化財などの展示が中心。1993年から昭和の日常生活用品の展示を本格化させる。
昭和34年の工場とその住居の再現	1991年開館
大正から戦前にかけて建てられた和洋折衷住宅の移築・復元	1993年開館
２ＤＫの団地の一部を館内に実物大で再現	1993年開館。2000年秋に企画展
昭和39年10月の琵琶湖近くに住む農家の暮らしを再現	1996年開館
昭和41年夏の作業所付併用住宅での生活の再現	1998年開館
昭和26年建築の住宅をそのまま利用して昭和の家財道具や衣類、くらしの道具生活を展示	1999年２月28日開館
昭和10年頃から昭和30年頃までの国民生活の労苦を紹介展示	1999年３月27日開館
昭和33年のチキンラーメンから始まる日清食品のインスタントラーメン商品とCM等を展示	1999年11月開館
昭和40年頃の仙台市の雑貨屋の再現	1999年開館
昭和30年代40年代の商店街が販売してきた商品のパッケージを展示	1999年開館
昭和30年初めの冬の高田の雁木通りの商店街を再現	2000年８月１日開館
昭和33年の江戸川団地の一戸建てを一部再現	2001年４月１日リニューアル
昭和27年の漁村を再現	2001年４月１日開館
江戸～昭和40年代頃までの暮らしの再現。古市中団地などについての展示もあり。	2001年４月26日開館
歴史的に価値の高い集合住宅を移築復元するとともに、集合住宅建設技術（工法・部材・部品・設備機器など）の歴史・変遷を展示	2001年10月に展示室を増設
大正末期～昭和初期の心斎橋筋、道頓堀などの街角を、大きさ、雰囲気そのままにきりとってリアルに再現。	2001年11月３日開館
昭和戦前から40年代頃までの遊び関連資料展示	2002年10月12日開館
昭和30～40年代の町並みの再現	2003年３月12日リニューアル
昭和40年代を中心としたニュータウン関連の資料展示。および実際の団地の一室公開。	2006年４月22日～６月４日開催の企画展
昭和33年の夕焼けの下町を演出	1994年３月６日オープン
昭和初期の大阪の下町の再現	1996年オープン
昭和30年代をイメージした町並みの再現	1997年一部オープン、1998年完成。
昭和40年頃の大阪下町の町並みの再現（ナムコ施設）	2002年７月オープン
昭和30年代の東京の下町を演出	2002年10月26日オープン
昭和30年代の里山風景、なつかしいおもちゃ、伝統芸能、郷土料理を味わえる	2003年４月オープン
昭和時代の日常品の展示	2003年９月にオープンしたが、2005年に閉鎖。
昭和20年代末から30年代初頭の下町の雰囲気を演出	2004年２月20日オープン
大正から昭和初期の繁華街を再現	2004年７月オープン
大正期の心斎橋筋の高級店の雰囲気を再現	2005年９月７日オープン
昭和ミニ資料館という名称で、昭和の品々を展示する施設・お店が14軒あり。昭和30年代の雰囲気を伝える。	
「寅さん」に代表される昭和の門前町商店街	
江戸時代以来栄える門前町商店街。現在の商店街は関東大震災で倒壊し建て直されたもの。	
下町の商店街。	
昭和レトロ商品博物館、青梅赤塚不二夫会館、昭和幻燈（げんとう）館などがあり、昭和レトロを売り出している。	
昭和40年代頃の雰囲気の商店街が残る	
路地や建物に戦前からの古い町の雰囲気が残る。長屋などを再生して展示商業施設にしている。	
昭和40年代頃の雰囲気の商店街が残り、それを核にした町おこしをめざしている。昔の学校給食が食べられる店などもある。	
木造３階建てアパートや旅館、路地、坂道などが古い町の雰囲気をよく伝える。	
戦前からの古い町の雰囲気がかなり残っている。	
狭い路地に昔ながらの風情が漂う。	
梅田から近いこともあり、古い町の雰囲気を活かして、カフェなどが進出。	
江戸、明治、大正などの建物が残り、それらを利用してミニ博物館が15も存在。展示されているものは、自転車、駄菓子、新聞など昭和のものも多い。	

國男、渋沢敬三、宮本常一といった学者たちが、大正期以降、日本の古来からの伝統的生活様式として取り上げ、「民俗学」というひとつの学問として研究されてきている。昭和ブーム、特にその中心となっている昭和30年代が、家庭電化製品の普及とともに都市的生活様式（場合によっては「洋風化」とも言える生活）が浸透していく過程であったがゆえに、都市圏においての方が、町並みも残っていれば、博物館もつくりやすいということなのである。

もうひとつ表1から気づくのは、博物館も商業施設も1990年代以降につくられているということだ。つまり「昭和」への注目は1990年代以降に生じたということが確認できるのである。この時期になぜこうした施設の開館が相次いだかということは後に詳しく分析するが、もっとも単純で大きな理由をひとつだけあげておけば、1989年の昭和天皇の崩御に伴い、昭和という時代が終わったことである。ひとつの区切りがつけば、振り返りたくなるのは、人の自然な欲求である。

昭和の庶民の生活を伝える書籍も数多く出版されている。大手の書店に行くと、こうした本を集めたコーナーがつくられており、多数の関連書籍が置いてある。この種の書籍は写真やイラストが多く、視覚に訴えるような形でつくられているのが特徴と言えるだろう。販売数は書籍によって様々であるが、版を重ねているもの[2)]も少なくないし、同じ著者が類似書を何冊も出版していたりするところを見ると、かなりの需要があると判断することができる。

写真2：昭和関連書籍

2－2．博物館・資料館

写真3：師勝町歴史民俗資料館

ここで、昭和の暮らしぶりを彷彿とさせるいくつかの施設や町並みを具体的に紹介してみたい。愛知県北名古屋市[3)]にある師勝町歴史民俗資料館は、「昭和日常博物館」とも呼ばれ、こうした昭和の暮らしの展示の先駆けとなった施設である。1990年の開館当初は、師勝町の埋蔵文化財や生活用具、農具な

どを展示するどこの町にでもありそうな郷土資料館だったが、1993年以降、昭和の資料を展示する資料館に変貌する。通常なら、ごみとして捨てられてしまいそうな日用品・生活用品を集め、整理して展示する「屋根裏の蜜柑箱は宝箱」という企画展が静かな評判を呼んだことがきっかけとなった。こうした昭和の展示を始める以前に行った10回の特別展・企画展の平均入館者数は3,444人、最高入場者数は7,290人だったのに対し、昭和の展示に変更して以降1999年までの７年間、21回の特別展・企画展の平均入館者数は10,589人、最高入場者数は24,052人と大幅に増加した[4)]。関連書を何冊も出している学芸員を中心に、資料の整理、展示の仕方も他の類似の資料館と比べて群を抜いている。さらに最近では、福祉医療分野との協力の下に「回想法」[5)]という心理療法に積極的に取り組んでおり、昭和の暮らしの展示をする資料館の新たな可能性を開きつつある。師勝町歴史民俗資料館は、浮ついた「昭和ブーム」とは一線を画した地道な取り組みをしている資料館として高く評価できるだろう。

写真４：松戸市立博物館

松戸市立博物館は、団地の一部が建物内部に実物大の大きさで再現されているユニークな博物館である。団地は戦後の住宅不足の中で良質の住環境を提供するために考え出された鉄筋コンクリート造りの集合住宅である。１棟だけの鉄筋コンクリート造りの集合住宅であれば、1916年に竣工された長崎県高島町端島（通称・軍艦島）の鉱員アパートが最古とされ、その後、関東大震災後に東京を中心に建てられた同潤会アパートメントがあり、戦後も都営高輪アパートメントが1947年に建設されている。しかし、複数の棟を建てひとつのコミュニティを作るという団地の一般的形態は、1953～57年にかけて建設された大阪市営の古市中団地を端緒とし、その後1955年に設立された日本住宅公団（現・独立行政法人都市再生機構）によって、都市近郊地域に普及していった。ダイニングキッチン、水洗（洋式）トイレ、自家風呂、シリンダー錠のドアなどに代表される団地は、「三種の神器」を代表とする家庭電化製品の普及とあいまって、昭和30年代には近代的都市的生活様式を満喫できる住宅の代表と考えられ、憧れの住宅となった[6)]。松戸市立博物館では、この団地２ＤＫの暮らしを博物館の中に再現して、評判を集めている。

吹田市立博物館は交通の便があまり良くないこともあり、これまで入館者数が決して多

いとは言えない博物館であったが、2006年4月に「千里ニュータウン展　ひと・まち・くらし」[7]を開催すると、わずか1ヶ月半で22,000人以上の人が来館した。2005年度の吹田市立博物館の全入館者数が17,000人だったことを考えれば、如何にこの企画が人気であったかがわかるであろう。この企画では、博物館内に三輪トラック「ミゼット」や移動式風呂「バスオール」を展示し話題を呼んだが、昭和40年代の暮らしを思い起こさせる日用品の展示は整理が不十分で、あまり洗練された企画展ではなかった。しかし、学芸員という専門家による知識の提供という形ではなく、市民自身を巻き込んで、手作り感のある企画として行えたことは、地元密着型の市立博物館としては大きな成功だったと言ってもよいだろう。書物や資料でしか知りえない大昔の歴史ではこうした企画はなしえないが、昭和30年代～40年代という時代ゆえに可能となった企画であり、ここにも博物館で「昭和」を取り上げる新たな可能性を感じ取ることができる。筆者が実際に感じたこの企画の魅力は、本館に展示されていた「ミゼット」や「バスオール」といった物ではなく、サテライトとして土日だけ公開されていた団地の一室で、かつてここの団地に住んでいた70歳代の女性たちの初期の団地での暮らし方についての止めど尽きない話であった。これも、まさに市民巻き込み型の企画であったがゆえに出し得た魅力であったと言えよう。

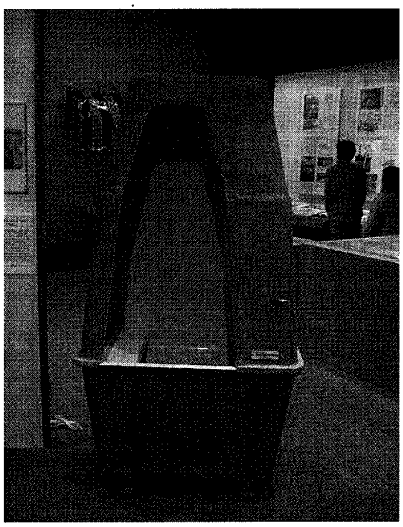


写真5：移動式風呂「バスオール」

2－3．商業施設

写真6：新横浜ラーメン博物館

次に、こうした昭和の雰囲気を、集客の道具として利用している商業施設について見てみよう。その代表格は、なんと言っても、新横浜ラーメン博物館である。ここは、1994年3月に開館後すぐに注目を集め、しばしば「昭和ブーム」の火付け役とも位置づけられる施設である。内容は、全国各地の有名ラーメン店の集合体にすぎないのだが、その集客のための仕掛けとしてつくった昭和33年の都会の下町の雰囲気が評判を呼んだ[8]。しかし、実際に筆者が訪問した印象では、通路

は狭く薄暗く場末の雰囲気が漂いすぎていて、それほど魅力的な施設だとは思えなかった。ここはある面では昭和33年の町の様子を当時に近い形で再現しているのかもしれないが、昭和30年代の雰囲気を求めて集まる人々が見たがっているものは、生活の暗さやしんどさよりも、どんどん生活が良くなっていくことを多くの人が感じていた「精神的明るさ」の部分であるが、それがこの新横浜ラーメン博物館では満たされない感じがした。

より新しくできた施設だからかもしれないが、新横浜ラーメン博物館より台場１丁目商店街[9]の方が昭和30年代の「明るさ」をうまく演出している。また、大阪の道頓堀極楽商店街[10]も、時代設定が大正から昭和初期にあるため、やはり物理的には狭く薄暗い印象を与えるが、ラーメン店ばかりでなく当時の庶民の飲食店をバランスよく配置し、エンターテインメントをうまく組み合わせることで、昭和初期の大阪の庶民のエネルギーの再現に成功しており、商業施設としてはよくできているという印象を受けた。

写真７：台場１丁目商店街

写真８：道頓堀極楽商店街

２－４．町並み

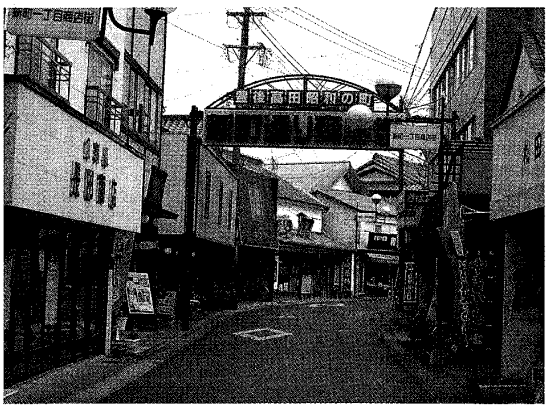


写真９：豊後高田新町通り商店街

現実の町で昭和の雰囲気を残す所として全国的にももっとも有名なのが、大分県の豊後高田市である。その中心部である新町通り商店街は「昭和の町」をキャッチフレーズにして観光スポットとなっている。なつかしい学校給食をアルミのお皿に盛りつけて食べさせる喫茶店があったり、昭和ロマン蔵と名付けた観光施設をつくり、そこに福岡県で開設されていた駄菓子屋の資料館を移転してきてもらったりと、確かに町全体に「昭和」を核にして活性化をはかっていこうと意欲に

満ちている。しかし、限られたスペースに計画的に町を再現し、集中的に資料を展示できる博物館や商業施設と違い、現実の町となると、どうしても印象が散漫になりがちである。多くの商店が利便性から変貌してきているため、昭和の建造物といってもいろいろな時代のものが混ざり統一性が乏しく時代イメージが不明確になってしまっている。また、昭和の建造物はあまりお金がかかっていないものが多く、景観としても美しさを感じさせない。さらに、観光客の立場からすると、見るべきものがもう少しないと足を運ぶ気にはならない。一度は興味を持って来た人も二度来たくなることはないだろう。こうした問題点を克服できないと、豊後高田の「昭和の町」の将来は厳しいかもしれない。

他方で、昭和を意識的に売りにしてはいないが、実際にそこに行くと、昭和の雰囲気が伝わってきて人気のある場所もある。そのひとつが、映画「寅さん」で有名な東京都葛飾区柴又の帝釈天参道商店街である。1969（昭和44）年から始まったこの映画シリーズは、1995（平成７）年まで続いたが、まさに昭和の臭いを感じさせる映画だった。渥美清演じる主役の車寅次郎の実家が、この帝釈天参道のだんご屋という設定になっており、実際に昭和30年代、40年代から変わらずこういう雰囲気だったのだろうと思わせる商店街がここには残っている。ここを訪ねてきた人はその時代の雰囲気を確実に味わうことができる。

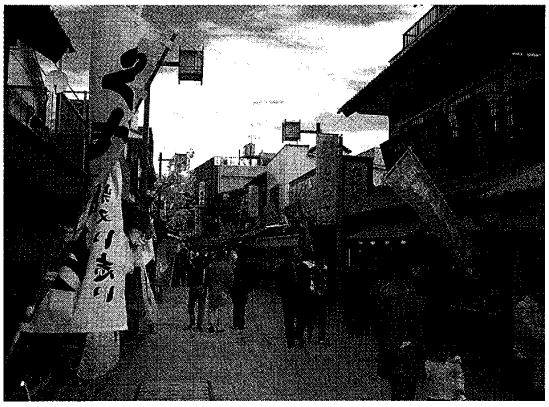


写真10：柴又の帝釈天参道商店街

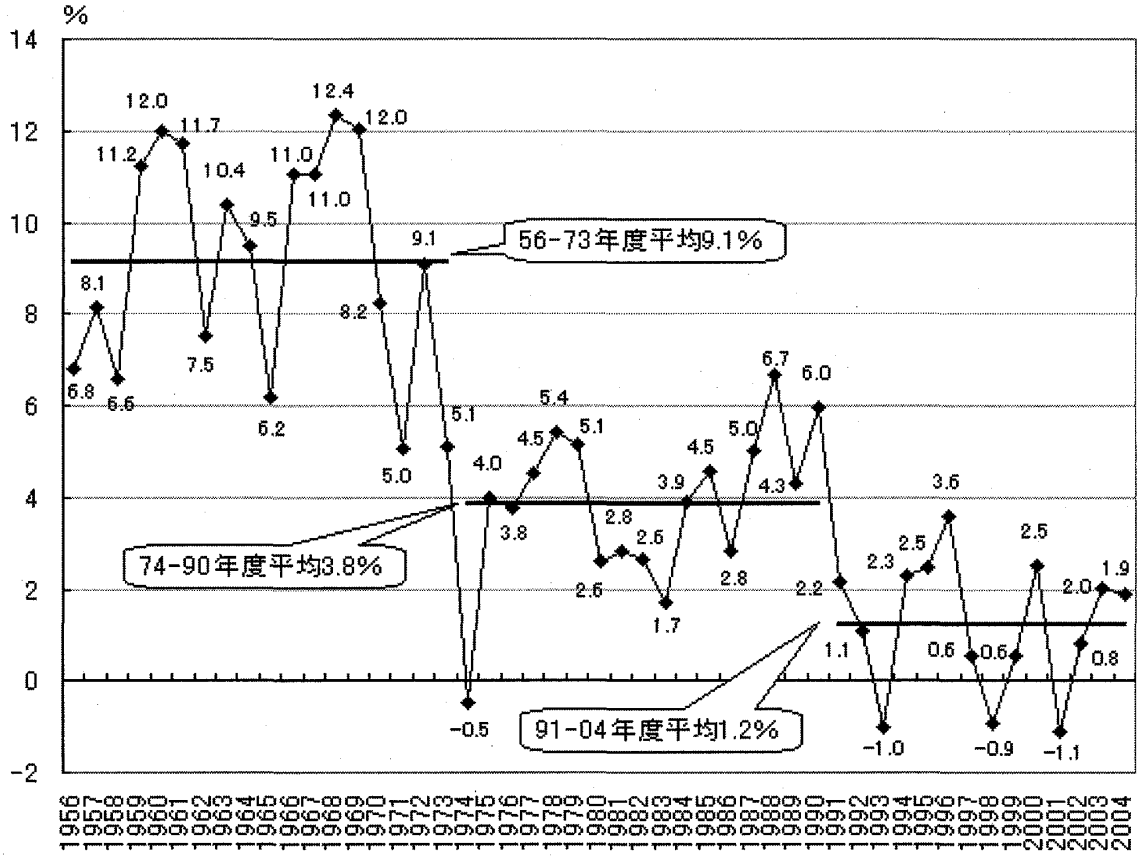
３．昭和の時代区分

昭和と一言で言うが、64年もの長さがあり、その間に大きな変化もしてきているので、「昭和ブーム」で取り上げられる昭和の実態を明らかにするためには、時代区分を行い、各時代の特徴を明らかにしておくことが必要である。昭和の時代区分としては、まずは３つの時期に分けるのが一般的であろう。第１期を経済不況・戦時期（昭和20年まで）、第２期を経済復興・成長期（昭和48年の第１次オイルショックまで）、最後の第３期を十分な豊かさを享受するようになった豊饒期（昭和64年まで）と呼ぶことができる。第１期は金融恐慌で始まり、戦争一色になっていく時代で、多くの人にとって楽しかった時代として思い出すことが困難な時代である。直前の大正時代の方が、第１次世界大戦後の好景気の影響もあり「大正浪漫」といった名称もあるようによい時代として思い起こす人が多い。

第２期は、①昭和20年代の経済復興期、②昭和30年代の高度経済成長前半期、③昭和40年代の高度経済成長後半期の３つにさらに区分しておく必要があるだろう。①の時期は、食糧難というどん底状態から始まり、昭和25（1950）年の「朝鮮戦争特需」を境に経済が漸く上向き始めた時代である。すべてが不足していた時代と記憶されている時代である。②の時期は、「戦後は終わった」で始まり、「東京オリンピック」に続く、多くの人がもっとも「よき時代」として思い浮かべ、現在の「昭和ブーム」の典型イメージを形成している時代である。なぜこの時代を人々が「よき時代」と考えるのかと言えば、大衆が身の丈レベルでの小さな幸せを実感し始め、さらに未来はよくなると心から思えた時代であったからである。町にはまだまだ戦前（昭和20年以前）にもつながる物がふんだんにあったが、その一方では「三種の神器」（テレビ、冷蔵庫、洗濯機）を代表とする家庭電化製品が家庭に普及していく時代でもあったし、オリンピックに向けて国土もどんどん変貌（東京の町並み整備、新幹線や高速道路の開通）をし始めていた時代であり、未来がもっとも明るく思えた時代だったからである。③の時期を代表するイベントはなんと言っても昭和45（1970）年に大阪千里丘陵で開かれた「日本万国博覧会（EXPO 70）」であろう。2005年に愛知で「愛･地球博」が開かれたこともあって、最近改めてスポットライトが当たり、「昭和ブーム」もこのEXPO 70あたりまでのイメージで作っている書籍も少なくない。しかし、この時期は「昭和元禄」と揶揄された時代でもあり、けだるい豊かさを大衆が享受しはじめる一方で、公害問題が表面化したり、大学紛争や新左翼系の運動が過激化したりで、②の時期ほど単純に日本はよりよい方向に社会は向かっているとは人々が信じられなくなりはじめた時代でもあった。

２度にわたるオイルショックを巧みに乗り切り低成長ながらも経済成長を続けていた第３期になると、もはや日本は豊かになりすぎて、これまで日本人の美徳とされてきた「勤勉、努力、忍耐」といった日本人の長所が薄れてきて、社会が退廃的になりつつあるという印象を持つ人が圧倒的に多くなる。昭和最後の数年間である昭和60年代は「バブル経済」の時代となり、今の時点ではこの時代を「よき時代」としてイメージする人は少ない。

経済成長率の推移



（注）年度ベース。93SNAベース値がない80年以前は63SNAベース。95年度以降は連鎖方式推計。
2005年1-3月期１次速報値　＜2005年5月17日公表＞
（資料）内閣府

図１：経済成長率の推移
（出典：http://www2.ttcn.ne.jp/~honkawa/4400.html）

４．昭和ブームを引き起こした要因

前２節で見てきたことからわかるように、現在の「昭和ブーム」は、昭和30年代を典型イメージとして、1990年代に入った頃から生じてきたものである。このブームを引き起こした原因としては、以下の４つの要因が考えられる。第１に、1989年１月７日をもって、昭和という時代が終わりを告げたことがあげられる。戦後○年、○周年など、人は区切りの時には過去を振り返りたくなるものである。天皇の崩御によって昭和が終わり平成という新たな時代に入ったことは、昭和に対する関心を高める最大の要因であったと言えるだろう。第２に、その昭和という時代が大正時代のように短くなく64年もの長さがあり、そ

の間に日本社会自体が大きく変化してきたため、振り返ってみたくなる素材が非常に多かったことがあげられよう。この第１と第２の要因からは、昭和全体を振り返ろうという志向性は出てくるが、特に昭和30年代あたりを中心にした「昭和ブーム」が生じたのは、以下の第３、第４の要因の影響が大きいと考えられる。第３の要因は、平成という新時代に入ってすぐにバブル経済が崩壊し、過剰な豊かさを追い求める価値観に反省が求められ、貧しかったけれど多くの人が未来を夢見ながら小さな幸せを感じていた時代が良い時代だったと見直されるようになったことである。そうした観点から見た場合、前節で述べたように昭和30年代こそまさにぴったりの時代だったのである。そしてもうひとつ、第４の要因としてあげられるのが、その数の多さによって戦後社会に常に大きな影響を与え続けてきた昭和22～24（1947～49）年生まれのいわゆる「ベビーブーム世代」[11] が平成に入った頃、40歳代というちょうど過去をなつかしみたくなる年齢に達していたことである。映画『ALWAYS　三丁目の夕日』の舞台ともなった昭和33（1958）年は、この「ベビーブーム世代」が、誰にとってももっともなつかしく思い出される小学校の中学年から高学年あたりを過ごしていた時代であった。自分が子どもとして過ごした時代を大人になってからなつかしむ気持ちは、おそらく誰にでも生じるものだろう。しかし、前節で見たように昭和20年代までは貧しさのイメージが強すぎてまだ未来を夢見ることが困難であったという点で、この時代を子ども時代として過ごした人にとっても、ブームにまでしたくなるほどのなつかしい時代とは位置づけにくかった。他方、「昭和ブーム」が徐々に昭和40年代にまで拡大しつつあるのも、その時代を子どもとして過ごした世代が40歳代に入ってきて、過去をなつかしみたがるようになってきたせいと言えるだろう[12]。ただし、「ベビーブーム世代」との人口の違い、また前節で指摘したような「昭和30年代」との時代イメージの違いを考えるなら、他世代も巻き込んだ昭和30年代ほどのブームにはならないと予想される。

５．歴史的環境としての昭和

「昭和ブーム」の中で様々な物が取り上げられているが、こうした物は文化財あるいは歴史的環境の一部を構成すると考えられる。一般的に、文化財と言えば古い仏像や宝物、そして古い建造物などを、歴史的環境と言えば古い町並みなどをその典型としてイメージするが、広義に捉えれば、どちらも長期間にわたって残ることによって、一定の価値を持つと見なされるようになったものである。こうしたものすべてで歴史的環境が形成されていると考えることもできる。人々が何を大切な歴史的環境と考えるかは、時代とともに変

化してきた。その変化は法律が何を文化財として保存対象として来たかで確認することができる。

まず1897（明治30）年に施行された「古社寺保存法」で歴史ある寺社やその宝物が保存の対象となり、大正から昭和初期にかけて「史蹟名勝天然紀念物保存法」（1919（大正８）年)、「国宝保存法」（1929（昭和４）年)、「重要美術品等の保存に関する法律」（1933（昭和８）年）ができて、寺社に関係のない特定の場所、特定の事物が保存対象とされるようになった。

伝統的な祭りや技術などの無形の文化財が保存対象と認識されるようになったのは、戦後の1950（昭和25）年に「文化財保護法」が施行されてからだ。1966（昭和41）年の「古都保存法」の制定は、日本の文化財について新たな考え方を導入することになった。それは、それまで点としてしか考えられていなかった文化財に、地区全体という「面」が認められるようになったということである。そして、1975（昭和50）年には、古都以外の古い町並みも「重要伝統的建造物群保存地区」として保存対象とする制度が「文化財保護法」に導入され、各地の江戸時代以前に作られた古い町並みも保存対象と考えられるようになった[13)]。

バブル経済期には、豊富な資金を使って歴史的環境保存のための新たな補助事業制度が創設（1980年代末～1990年代初め）されたり、「世界遺産条約」が20年目に漸く批准（1992）されたりし、歴史的環境保存が進んだ。バブル経済崩壊も、環境問題全般への関心の高まりやソフトな開発として受け入れられやすいといった理由から、歴史的環境保全には逆風が吹かず、着実に保存対象を拡大してきている[14)]。1996（平成８）年には、「文化財登録制度」が導入され、造られて50年以上経つ建造物で、地域で愛されシンボル的な役割を果たしているものを「登録有形文化財」にすることができるようになり、それまで保存対象と思われてこなかった昭和の建造物が文化財として認められるようになった。さらに、2004（平成16）年には、建造物以外の有形民俗文化財、記念物（史跡・名勝）についても登録制度が導入され、それぞれ登録有形民俗文化財、登録記念物として保存対象となった。

こうした流れの中で、古い町並み保存などでは常に邪魔者扱いされてきた電信柱や電柱や安っぽい造りの家（団地を含む）も、今や人々にノスタルジーを感じさせる歴史的環境の一部を形成するようになったと言えるだろう。まさにどんなものでも時が経てば、歴史的環境になりうる時代になったと言えよう。2006年現在から遡れば、1956（昭和31）年以前の建造物であれば50年以上経っていることになるので、まさに昭和前半は、国の法的な規定でも堂々たる歴史的環境になったわけである。今もっとも人気がある昭和30年代のお

もちゃや生活用具を展示する博物館や商業施設が増えているが、これらも近い将来、登録有形民俗文化財になっている可能性は十分ある。

6．昭和ブームの行方

『ALWAYS　三丁目の夕日』は映画としてよくできていたので、平成の記憶しかない若い人でも「昭和30年代って、なんかいい感じだな」という印象を持ったわけだが、当時の実際の映像を見せると、みんなびっくりして「絶対あんな暮らしは嫌です」という顔をする。当時を子どもとしてあるいは若者として過ごし、厳しい現実を詳しく知らずにいた人も似たような感覚を味わうかもしれない[15)]。改めて現実を知れば、誰もあんな経済的に貧しい生活をしたくはないので、若者を中心とした昭和に対する憧れ的なブームは単なる一時的ブームで終わる可能性が高い。特に、昭和ブームでもてはやされている文化は大衆化の進みつつあった庶民の文化であるがゆえに、少数の金持ち階層の文化として残されていることの多い江戸・明治・大正の文化に比べると安っぽく、個々に見た場合それほど優れたものは多くなく、消えていく可能性も小さくない。

とりあえず、昭和の記憶がある世代が元気なうちは、中心的な時代はだんだん新しくなるだろうが、昭和を残そうという動きは増えることはあっても減ることはないだろう。しかし、さらに時間が経てば、今われわれが明治に対して持つ感情と同様な感情しかもてない人が大多数となり、昭和も書籍と博物館の中の歴史となってしまうのだろう。これまでの注目のされ方を見てくると、生活文化は40～50年後あたりがもっとも振り返られることが多く、その時期を過ぎると歴史になっていくように思われる。この推測が正しければ、昭和30年代を中心としたブームは、後しばらくは続くだろうが、その後はより現在に近い昭和40年代、50年代の方に注目が集まってくるだろう。そして2050年頃には、昭和は博物館の中の歴史となっているだろう。本来なら建築物は50年以上経ってから歴史的遺産として注目されることになるので、昭和の町並みなどが、現在の重要伝統的建造物群保存地区のような保存対象地区になっていることも可能性としては考えられるが、安っぽい造りの昭和の建造物は50年以上持つものが少なさそうなので、これも難しいかもしれない。ブームはいずれ去るものなのでこれも致し方ないところだろう。しかし、もしも昭和30年代から学ぶべきことがあるなら、それを次の世代に伝えていくことも大事な仕事である。

昭和、特に戦後という近過去を知ることで、「いま」を相対化して見る視点を獲得することができる。戦後という近過去を知ると、今の時代に存在する様々なものが、少し前まではなかったり、あってもかなり素朴なものでしかなかったことに気づく。平成では最近

すぎて、まだ「いま」のうちに包摂されてしまうし、明治・大正は古すぎて、「いま」の適切な比較対象にはならない。世代の価値観のギャップを埋めるためにも、近過去を知ることには大きな意味がある。社会学では、「いま、ここ、わたし」を相対化して見る視点が大事なのだが、近過去を知ることで、「いま」と「わたし」の相対化はしやすくなるはずである。今、生じている「昭和ブーム」を単におもしろおかしい文化があったという観点からではなく、そこから今を相対化するための視点を得たり、2節で紹介したような「回想法」への利用を広げていくならば、「昭和ブーム」を単なるブームで終わらせずに、これを通して大事なことを学ぶ機会とすることもできるのではないだろうか。

注

1）現在80ある重要伝統的建造物群保存地区だが、東京、横浜、名古屋、大阪、福岡などの都市にはひとつもない。

2）1999年10月1日に初版が刊行された加藤嶺夫『東京消えた街角』という写真集は、2年弱で7刷、2000年11月20日に初版が刊行された小泉和子『昭和のくらし博物館』は、4年で6刷、2001年8月30日に初版が刊行された市橋芳則『昭和路地裏大博覧会』は、2年弱で3刷まで出されている。

3）2006年3月20日に、西春町と合併し北名古屋市となったが、それまでは師勝町として独立自治体だった。名古屋市に隣接し、名古屋市のベッドタウンとして人口が急速に増加してきている。

4）師勝町歴史民俗資料館編『研究紀要10』師勝町歴史民俗資料館、2000年、pp.5－6参照。

5）高齢者が昭和のなつかしい品々に囲まれ、昔を思い出し、それらについて語り合うことで、認知症の予防や進行遅延の一助になるという心理療法。師勝町歴史民俗資料館編『研究紀要14　博物館と回想法』師勝町歴史民俗資料館、2004年参照。

6）昭和30年代には団地の入居希望者は非常に多く、毎回抽選による入居であったが、何百倍という倍率になることがざらにあった。

7）千里ニュータウンは、日本住宅公団が中心となって造成された日本初の大規模ニュータウンである。1962年に入居が開始され、10万人以上の人が移り住んだ。

8）昭和33年にしたのは、インスタントラーメンが誕生した年で、ラーメンにとっては縁の深い年だったからである。

9）建物の1フロアに、昭和30年代の東京の下町にあったような店舗を集めた商業施設。20002年10月オープン。

10）建物の3フロアを利用して、大正から昭和初期の大阪の繁華街を再現した商業施設。飲食店とエンターテインメントを組み合わせたもので、2004年7月オープン。

11）この世代が大きな塊となって通り過ぎるたびに社会にはいろいろ新しいものやことが生み出されてきた。10～12歳だった昭和34年には週刊漫画誌が創刊され、19～21歳だった昭和43年には、青年漫画誌が創刊され、大学紛争が過激化した。

12）昭和40年代の思い出の資料となると、ウルトラマンや怪獣、TVアニメなどが必須アイテムとして登場してくる。家庭電化製品などの展示で生活の変化を30年代がイメージされるのに対し、40年代は遊びや娯楽の面での変化を強く意識させる。

13）これ以降、「歴史的環境」という概念がよく使われるようになる。片桐新自編『歴史的環境の社会学』2000年、新曜社、参照
14）バブル経済崩壊直後の1993年時点で重伝建地区は36地区しかなかったのが、2006年現在では78地区になっている。
15）それは、昭和30年生まれの筆者の実感でもある。

参考文献

天野正子「道具から見た昭和の女性史」師勝町歴史民俗資料館編『研究紀要12』師勝町歴史民俗資料館、2002年３月。
青木俊也『再現・昭和30年代　団地２ＤＫの暮らし』河出書房新社、2001年５月20日。
『別冊太陽　子どもの昭和史　昭和10年～20年』平凡社、1986年８月25日。
『別冊太陽　子どもの昭和史　昭和20年～35年』平凡社、1987年12月27日。
『別冊太陽　子どもの昭和史　昭和35年～48年』平凡社、1990年２月11日。
ブルーガイド編『東京懐かしの昭和30年代散歩地図』実業の日本社、2005年２月４日。
橋本文隆・内田青蔵・大月敏雄編『消えゆく同潤会アパートメント』河出書房新社、2003年12月30日。
市橋芳則『昭和路地裏大博覧会』河出書房新社、2001年８月30日。
市橋芳則『キャラメルの値段』河出書房新社、2002年９月30日。
市橋芳則「『昭和日常博物館の試み』の継続と『回想法・高齢者ケアの古くて新しいツール』の展開について」師勝町歴史民俗資料館編『研究紀要14』師勝町歴史民俗資料館、2004年３月。
伊藤正直・新田太郎『ビジュアルNIPPON　昭和の時代』小学館、2005年８月10日。
片桐新自編『歴史的環境の社会学』新曜社、2000年10月５日。
加藤嶺夫『東京消えた街角』河出書房新社、1999年10月１日。
加藤嶺夫『東京懐かしの街角』河出書房新社、2001年７月25日。
加藤嶺夫『東京の消えた風景』小学館、2003年３月10日。
川本三郎（文）･春日昌昭（写真）『岩波フォト絵本　オリンピックの頃の東京』岩波書店、2002年12月20日。
川本三郎監修『寅さん完全最終本』小学館、2005年11月20日。
小泉和子『昭和のくらし博物館』河出書房新社、2000年11月20日。
小泉和子編『ちゃぶ台の昭和』河出書房新社、2002年11月30日。
近藤雅樹『図説　大正昭和くらしの博物館――民俗学の父・渋沢敬三とアチック・ミューゼアム――』河出書房新社、2001年３月10日。
串間努『図説　昭和レトロ商品博物館』河出書房新社、2001年７月30日。
町田忍『ぶらり散策　懐かしの昭和』扶桑社、2001年４月20日。
町田忍『懐かしの昭和30年代』扶桑社、2002年12月30日。
町田忍『昭和レトロ商店街――ロングセラー商品たちの知られざるヒストリー――』早川書房、2006年１月31日。
武藤盈・須藤功『写真で綴る昭和30年代　農漁村の暮らし』農山漁村文化協会、2003年３月５日。
新田太郎・田中裕二・小山周子編『図説・東京流行生活』2003年９月30日。
奥成達（文）・ながたはるみ（絵）『駄菓子屋図鑑』ちくま文庫、2003年３月10日。
師勝町歴史民俗資料館編『研究紀要10』師勝町歴史民俗資料館、2000年３月。
師勝町歴史民俗資料館編『研究紀要12』師勝町歴史民俗資料館、2002年３月。
師勝町歴史民俗資料館編『研究紀要14――博物館と回想法――』師勝町歴史民俗資料館、 2004年３月。

師勝町歴史民俗資料館編『研究紀要15』師勝町歴史民俗資料館、2005年３月。
『昭和ニッポン』第１～24巻（DVD Book）講談社、2004～2005年。
太陽編集部編『昭和生活なつかし図鑑』平凡社、1999年３月25日。
植田実『集合住宅物語』みすず書房、2004年３月１日。

－2006.12.18受稿－